



主な内容

新年のご挨拶

特集——がんゲノム医療の概要と本学附属病院の役割

トピックス—附属病院移転に伴う入院患者搬送計画連絡会が行われました

フリーページ—すやかスポット薬学講座No.16

「薬学教育学分野の研究・教育について」

表紙写真：建設工事が進む矢巾新病院（2019.1.10撮影）

# 新年のご挨拶

理事長 小川 彰



あけましておめでとうございます。今年は本学にとって歴史的転換点を迎える年となります。

いよいよ、矢巾新病院の全貌が見えてきました。周辺の道路の拡幅整備も進んでいます。正面玄関前の公道から望む新病院は巨大でその威容は周囲を圧迫するほどです。A敷地とつながり空中廊下も未だ骨格だけですが道路の上を通りました。矢巾町民も「いよいよだ」と期待を膨らませています。空中廊下に隣接する店舗棟（トクタヴェール）、その東に位置する健康プラザ（コスモス館）、そして、ホテルの建築も始まりました。300室のホテルは10階建てで、最上階まで鉄骨が組みあがり全体像が見えてきました。また、「岩手医科大学やはばなかよし保育園」の建築は既に完成し、去る12月25日に引き渡しを受けました。保育室からは病院、ドクターヘリの発着も見え、素晴らしい保育環境で、2月1日には開園の予定です。保育園の横を救急車が高度救命救急センターに向かいます。医療人の子弟が病院の威容とドクターヘリの発着を見ながら保育を受け、将来医療人になる夢を持ちつつ成長して行くことを期待しています。

引っ越し業務は長期にわたりますが、患者さんの引っ越しは1日で完結しなければなりません。1,000床の病院を、患者さんとともに、9km

もの遠くに引っ越しする「大プロジェクト」は前例がありません。作戦実施日は3連休の初日9月21日（土）です。患者搬送に使う救急車、寝台車は消防や各病院、自衛隊やタクシー会社所有のもの全てを動員して当たります。交通規制等には各自治体、警察の協力を仰ぐことになります。いずれ、本番の9月21日（土）はじめ、その前後に長く続く引っ越し大作戦は日本通運にお願いする事と致しましたが、日本通運は内丸キャンパスに事務所を構え、「何を」「何時」「どのような方法で」搬送するか作戦を立て始めています。さらに、行政にはすでに大きなイベントを9月21日（土）前後には入れないよう依頼済みで、様々な分野で事前準備が進んでおります。世紀の一大プロジェクトが完遂し新病院での診療が開始されるまで、気の許せる状況にはありません。

重症患者さんはもとより、全ての移転業務には失敗は許されません。安全で事故なく、新築移転が完了できるよう、全学の全ての教職員が心を一つにして努力してゆこうではありませんか。



## 学 長 祖父江 憲治

明けましておめでとうございます。今年は例年になく雪の少ない年明けとなり、皆様方におかれましては、御家族共々に健やかな新年を迎えられましたこととお慶び申し上げます。

本年9月には、1,000床規模の世界屈指の矢巾新病院が開院予定です。現在は外装工事が終了し、内装工事の段階に入っています。矢巾新病院開院に伴い、内丸の現附属病院に入院されている患者さんの600名(予定)前後を、矢巾新病院に搬送する一大プロジェクトを控えています。我が国で行われた病院移転に伴う患者さんの搬送は、これまでは多くとも200名前後でした。それも今回は盛岡(内丸)と矢巾という片道約9kmの距離を搬送するもので、搬送人数も移動距離も我が国で最大規模の大搬送計画です。何一つトラブルなく搬送することが絶対条件であり、本学スタッフの皆様と県医師会・郡市医師会・県警・消防・自衛隊と岩手県・盛岡市・矢巾町などの皆様のご協力を賜り、一丸となりこの大プロジェクトを完遂してまいりましょう。

また、開院後は矢巾新病院と内丸メディカルセンターという二大病院の運営という、本学にとっては未体験ゾーンに入っていくことになります。この試練を乗り越え、矢巾新病院は入院を中心とした最先端の先進医療病院、内丸メディカルセンターは外来を中心とした高度治療病院としての役割を果たすこととなります。本学建学の根幹である地域医療と先進医療による特定機能病院という県民の負託に応えていかなければなりません。内丸メディカルセンターの新・改築を早期に実現し、岩手県のみならず北東北、さらに東北の医療拠点としての使命を、皆様とともに力を合わせ

成し遂げてまいりましょう。

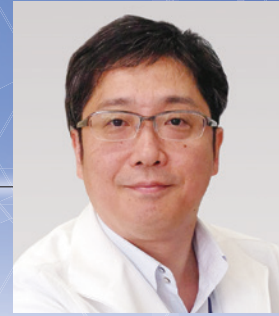
矢巾新病院と内丸メディカルセンターは、医療系総合大学としての医・歯・薬・看護学部の学生諸君にとっても、壮大な実地教育病院となります。また卒後の医療人教育においても、本学のみならず全国から医療人を受け入れ、より多くの高度専門医療人として育成し、本学から岩手県のみならず北東北、東北さらには日本全国へ輩出していかなければなりません。

学生教育につきましては、全学部の1・2年生に低学年クライシスと言われる現象が顕著になってきました。これは本学のみならず、全国的な問題です。入学が目標で入学後に将来の目標を失う、勉強方法(ラーニングスキル)が分からないなど、原因は多種類です。この低学年クライシスを解決出来ないままに進級しますと、高学年になってついていけないという事態に陥ります。早期に低学年クライシスを見つけ出し、解決することが重要です。教育現場におられる教員の皆様には、この点を充分にご留意願いたいと思います。

矢巾新病院開院後には、病院機能評価や各学部教育分野別評価などが目白押しで、関係各教職員の皆様には現在でも大変なご苦勞をお掛けしております。長い歴史を刻んできた本学ですが、この大変革期に臨み、従来以上に教職員の皆様方が心を一つにして、本学の発展に向け、力を合わせようではありませんか。皆様方のご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。年頭のご挨拶と致します。

# がんゲノム医療の概要と 本学附属病院の役割

腫瘍センター長 伊藤 薫樹



本学附属病院は昨年10月に本県で唯一、がんゲノム医療連携病院として厚生労働省から指定を受けました。今回の特集では、がんゲノム医療の概要や連携病院の役割、今後の展望などについて紹介します。

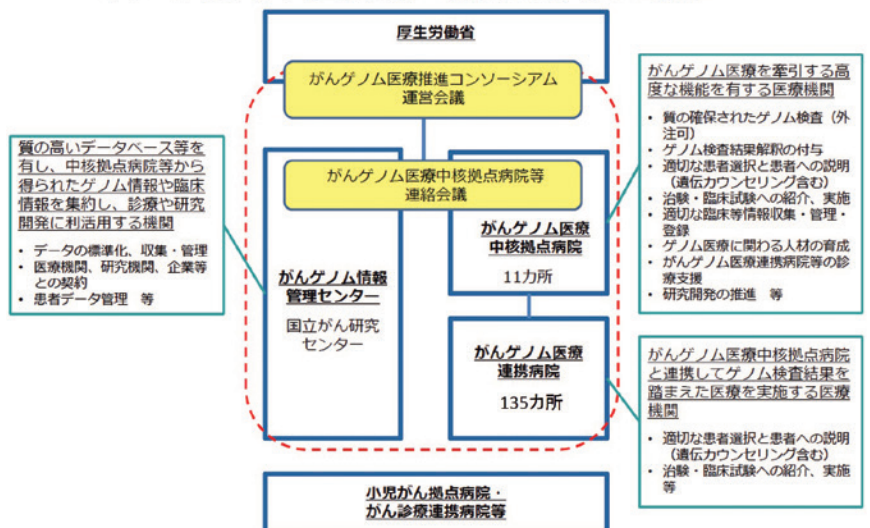
## ■ 概 要

「がんゲノム医療」とは遺伝情報を網羅的に調べて、その結果をもとに、より効果的に診断や治療を行う医療です。第3期がん対策推進基本計画の分野別施策である「がん医療の充実」の中でも、「がんゲノム医療」が筆頭に挙げられており、国としてのがん対策の重要な取り組みの一つとなっています。

当院は、2018年10月に、この医療を推進する「がんゲノム医療連携病院」に指定されました。「がんゲノム医療」が進められてきた背景には、がんの発症・進展のメカニズムが分子レベルで解明され、がん分子標的薬の標的分子が数多く同定されたことや分子標的薬の開発も急速に進んできたことがあります。例えば、肺がんではがんの発生や進展に直接関わる重要な遺伝子（ドライバー遺伝子）変異がいくつか同定されていますが、治療前がん組織の遺伝子検査を行うことにより、患者毎に有効な治療薬を選択することができます。最近では組織を採取しなくても血液中に含まれるがん由来のDNAを用いる（リキッドバイオプシー）ことにより、簡便に遺伝子異常が調べられる時代になってきました。また、最近注目されている免疫チェックポイント阻害薬は、遺伝子変異の多いがんの有効であることがわかってきており、治療適応を決めるバイオマーカーとしてのゲノム検査が期待されています。現在は、臓器別に

がんの薬物治療が行われていますが、他臓器のがんであっても同じ遺伝子異常が原因となっているものもあり、有効な治療法のない患者さんが他のがん種に承認されている治療薬で治療を受けることができる可能性があります。つまり、これからのがん薬物治療は、がん臓器特異的な治療から生物学的な背景別の治療が行われる新たな時代にシフトしつつあると言えます。

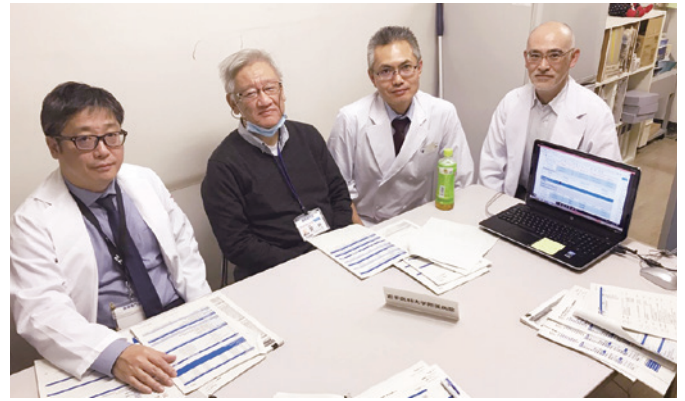
国はこのような「がんゲノム医療」を早急に整備するため、国立がん研究センターを中心として、がんゲノム医療中核拠点病院（全国に11カ所）および各中核拠点と連携する連携病院（全国に135カ所）による取り組みを進めています（図1）。



＜図1 がんゲノム医療提供・情報収集体制の全体像＞

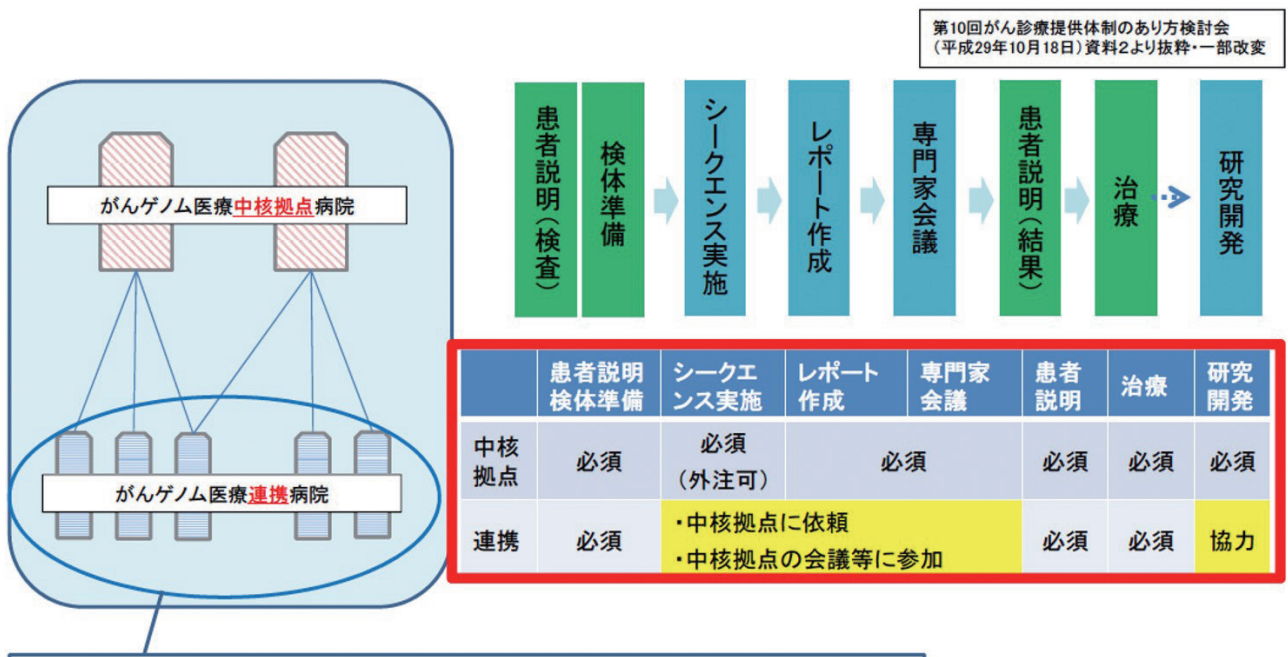
## ■ 連携病院としての当院の役割

当院は、中核拠点である東北大学病院と連携し、ゲノム医療を希望された患者さんに説明を行い、遺伝子パネル検査のための検体を準備します。遺伝子シーケンス<sup>※1</sup>を行った後に中核拠点病院が治療対象として意義のある遺伝子異常を抽出し、候補の治療薬の選択およびその医療を受けられる治験情報などをまとめたレポートを作成します。その後、中核・連携病院間で形成されたエキスパートパネル<sup>※2</sup>により十分に検討（右写真）した上で、最終結果を患者さんに説明して治療を行ったり、治験や臨床研究が行われている施設に紹介する役割を担うこととなります（図2）。



＜がんゲノム診断カンファレンス 平成30年12月3日開催＞  
左から：伊藤センター長、病理診断学講座より菅井教授、刑部講師、上杉講師  
この日は中核拠点病院（東北大学病院）と8連携病院をTV会議システムで接続して4症例について検討した。

- ※1 遺伝子シーケンス：遺伝情報をもったDNAの塩基配列を調べるための分析法。
- ※2 エキスパートパネル：各分野の専門家が集まって検討し、解析結果の意義づけと治療法の提案を行うこと。



H30年3月14日：がんゲノム医療連携病院をがんゲノム中核拠点病院が申請※

※がんゲノム医療中核拠点病院は、整備指針の要件を満たしていることを確認の上、自らが連携するがんゲノム医療連携病院の候補となる医療機関を、厚生労働大臣に申請する。  
以後、がんゲノム医療中核拠点病院からがんゲノム医療連携病院の追加を、6ヶ月ごとを目処として厚生労働大臣に申請する。

＜図2 がんゲノム医療中核拠点病院とがんゲノム医療連携病院の機能＞

## ■ 今後の展望

この医療を当院で円滑に進めていくためには、院内のコンセンサス形成はもちろんのこと、遺伝カウンセリング体制や治験・臨床試験への紹介体制、適切な臨床等の情報収集・管理・登録システムの整備、ゲノム医療に関わる人材の育成が必要不可欠です。現時点で、このゲノム医療に最終的にアクセス可能な患者さんの

割合は5%と少ないですが、今後のゲノム医療の進展に伴い、アクセスできる患者さんが増えることが期待されます。岩手県でのがんゲノム情報に基づいた最適ながん医療の推進のために皆様のご理解とご協力をお願い致します。

## 「岩手県総合防災訓練・みちのくアラート2018」に岩手医科大学DPATが参加しました

11月9日（金）、岩手県庁舎内において、4年毎に開催される陸上自衛隊東北方面隊主催の大規模災害訓練「みちのくアラート」が「岩手県総合防災訓練」と併催で行われました。岩手医科大学DPAT\*<sup>1</sup>（神経精神科学講座から大塚耕太郎教授ほか4名）が精神科関連の医療チームとして初召集となり、岩手県障がい保健福祉課、岩手県精神保健福祉センターとともに訓練に参加しました。

岩手県三陸沖南部地震の津波被害を想定した図上訓練では、災害対策本部機能の一環で関係部局と関係機関が演習を行いました。岩手医科大学DPATは沿岸精神科医療機関の支援のための調整本部の設置やDMAT\*<sup>2</sup>等との円滑な連携を目標に活動しました。

\*1 DPAT：災害派遣精神医療チーム \*2 DMAT：災害派遣医療チーム



達増県知事の立ち会いによる班長ミーティング

## 平成30年度クラブ活動報告会が行われました

12月3日（月）、矢巾キャンパス大堀記念講堂において、平成30年度クラブ活動報告会が行われ、祖父江憲治学長をはじめ、各学部長、各学部の学生部長、各クラブの部長及び学生が出席しました。

報告会では、今年行われた各種体育大会で優秀な成績を収めた団体、学友会活動に貢献した文化部へ表彰が行われました。



## 第4回いわて東北メディカル・メガバンク機構学内報告会が行われました

12月6日（木）、創立60周年記念館10階会議室と矢巾キャンパス大会議室を映像でつなぎ、第4回いわて東北メディカル・メガバンク機構（IMM）学内報告会が行われ、祖父江憲治学長をはじめ、教職員約60名が参加しました。

当日は佐々木真理機構長らにより事業の進捗状況や研究成果についての報告が行われました。

同機構では、引き続き東北メディカル・メガバンク計画を推進し、被災地域を中心とした健康調査や人材派遣により地域医療の復興に貢献するとともに、次世代バイオバンクの構築や解析研究などに励み、個別化医療・予防医療の実現を目指します。

### 報告内容

#### 「第二段階の進捗状況と今後の展開」

いわて東北メディカル・メガバンク機構

佐々木 真理 機構長



#### 「地域住民コホート調査

—詳細2次調査と追跡調査の進捗状況—

臨床研究・疫学研究部門

丹野 高三 部門長代理



#### 「ゲノムオミックス解析の進捗と

今後の研究シーズ」

生体情報解析部門

清水 厚志 部門長



### 前回報告会（2017年12月実施）以降の主な研究成果

#### 記者会見

2018.2.9

NPO法人北三陸塾（久慈市）と連携し、北三陸ネットにIMM地域住民コホート調査結果の情報提供開始

#### 論文

2018.3.29

iMETHYL：ヒトDNAメチル化情報、遺伝子発現情報、ゲノム多型情報からなる統合データベース

2018.9.5

ゲノムコホート参加者に対する遺伝に関する講習会前後の遺伝学的知識ならびに遺伝学的検査結果回付への需要の比較

2018.9.21

食塩摂取量と交互作用し、血圧に影響を及ぼす遺伝的多型を全ゲノム関連解析によりBCL11B遺伝子3'末端側の遺伝子砂漠領域に新たに同定

※研究成果の詳細は同機構のホームページをご覧ください。

## 医療安全講習会が行われました

12月11日（火）、岩手医科大学講堂において、本学附属病院医療安全管理部主催の医療安全講習会が行われました。

当日は医療機器と医薬品の安全使用をテーマに、臨床工学部の泉田拓也主任臨床工学技士及び薬剤部の佐藤文彦副薬剤部長により講演が行われました。参加者は医療機器のアラーム機能の適正使用について、また、麻薬・向精神薬等の適正管理・使用手順について理解を深めました。



佐藤副薬剤部長による講演

## 西5階A病棟でクリスマス会が行われました

12月13日（木）、西5階病棟のプレイルームにおいて、平成30年度のクリスマス会が行われました。この会は西5階A病棟に入院している子どもたちやその保護者の方々にクリスマス気分を味わっていただけるよう毎年行われています。

当日は、始めに青松支援学校の生徒さんにより、「ふるさと」の合唱が手話つきで披露されました。その後、病棟で実習中の看護学生によるクイズ大会が行われ、正解者には折り紙が贈られました。また、スペシャルゲストとしてトナカイに扮したピエロののだあちゃん（写真）が登場し、輪投げのパフォーマンスで会場を盛り上げました。



## 血管病研究プロジェクトの研究発表会が行われました

12月12日（水）、創立60周年記念館10階会議室と矢巾キャンパス大会議室を映像でつなぎ、血管病研究プロジェクトの研究発表会が行われ、学内の関係者約50名が参加しました。



石垣泰研究推進委員長による発表

当研究発表会は平成29年度に本学が採択された私立大学研究ブランディング事業の一環として行われました。本学の事業テーマは、「医歯薬連携による全身疾患としての血管病の地域還元型学際的研究拠点」で、北東北に多い血管病に関する学際的研究体制を整備し、多角的な基礎・臨床共同研究を全学で推進しています。

当日は各研究チームのリーダーから研究テーマの解説や進捗状況の説明が行われました。出席した祖父江憲治学長は、「全学をあげてこのプロジェクトに取り組んでいる。血管病の研究拠点を形成するとともに、一日も早く研究成果を地域医療に還元してほしい。」と激励しました。



挨拶する祖父江学長



会場の様子

## 自由科目「地域医療課題解決演習」の検討発表会が行われました

12月14日（金）、矢巾キャンパスにおいて、地域医療課題解決演習の検討発表会が行われ、本学教職員及び矢巾町役場関係者が学生たちの発表に耳を傾けました。

この授業は矢巾町と平成29年3月に締結した地域医療政策・教育分野における連携に関する協定に基づき、実施されています。学生たちは地域社会における医療課題について検討を行い、検診会場等への訪問や行政職員・医療職員へのインタビュー、地域住民へのアンケート等を通して課題背景を学び、その成果として課題解決に向けた施策提案を行いました。



## 附属病院移転に伴う入院患者搬送計画連絡会が行われました

12月20日（木）、創立60周年記念館10階会議室において、附属病院移転に伴う入院患者搬送計画連絡会が行われ、小笠原邦昭病院長をはじめ学内関係者が警察・消防・行政・公共交通機関などの代表者約40名に対し、患者搬送計画の概要を説明しました。

当連絡会は本年9月に開院する矢巾新病院への患者搬送を円滑に実施するため、搬送計画や搬送手段・ルート共有を目的とし、今回初めて開催されました。

小笠原病院長は冒頭の挨拶で「すべての入院患者さんの搬送を無事に完了するために、関係機関の皆様には是非ご支援いただきたい。」と述べ、各関係機関に協力を要請しました。



## 平成30年度高大連携ウィンターセッションが行われました

12月25日（火）、26日（水）の2日間、矢巾キャンパスにおいて、いわて高等教育コンソーシアム（岩手県立大学、岩手大学、盛岡大学、富士大学、本学）と岩手県教育委員会が主催する高大連携ウィンターセッションが開催されました。

当催事は県内の高校生が県内各大学の教育・研究内容に触れる機会をつくり、各大学で学ぶことができる内容を広く知ってもらうことを目的として平成15年から開催しています。

本学は医・歯・薬・看護学部がそれぞれ講座を開講し、142名の受講者が各講座の講義や実習を体験しました。



医学部「学ぶ災害医療」



歯学部「『歯のはえかわり』と『むし歯について』」



薬学部「薬学での学び『くすりの今と昔』」



看護学部「いのちの始まりから人びとを支える看護」



# やはばなかよし保育園が スタートします。

岩手医科大学  
やはばなかよし保育園

平成 31 年 2 月よりプレオープン

平成 30 年 12 月 25 日（火）、やはばなかよし保育園の落成・引き渡しが行われました。  
平成 31 年 5 月から 9 月の入園希望申請を 3 月 20 日まで受け付けています。  
詳しくは人事職員課（内線 3234）までご連絡ください。

## 特徴

- ・ 床は人にも環境にも優しい天然素材
- ・ 保育室は間仕切り壁がない見通しの良い空間
- ・ 赤ちゃんのための沐浴室
- ・ 玄関はインターホン形式でセキュリティも安心
- ・ 病児保育エリアは出入口・保育室を分離して、感染に配慮
- ・ 食事・おやつは園内の厨房で手作り
- ・ 矢中新病院が近い

## 園長先生からひとこと

木のぬくもりが感じられ、明るく素敵な園舎です。  
この素敵な園舎で子どもたちはのびのびと過ごしてくれることと思います。

私たちは子どもたちの安全を一番に考え、安心して預けていただける環境を整えていきます。

## ● 利用資格

1. 本学教職員 2. 委託職員又は派遣職員 3. 本学学生

## ● 保育対応時間

基本保育	平日（月～金）	7：00～18：00 （延長 6：00～7：00 / 18：00～20：00）
	第1・4土曜	7：00～13：30 （延長 18：00 まで）
夜間保育	平日（月～金）	18：00～7：00
休日保育	日曜・祝日、第2・3・5土曜	7：00～18：00
一時保育	平日（月～金）	7：00～18：00
	第1・4土曜	7：00～13：30
病児保育	定員 10 名	
	平日（月～金）	7：30～17：30

## ● 保育料金

基本保育料 （月額）	0 歳	37,100 円	1 歳	37,000 円
	2 歳	37,000 円	3 歳	31,100 円
	4・5 歳	27,600 円		
基本外保育料	延長	300 円 / 時間（月上限 2,400 円）		
	夜間・休日・病児	2,000 円 / 回 一時：3,000 円 / 回		



# シリーズ 職場めぐり

## 頭頸部外科学科

頭頸部外科は、頭部～頸部領域の手術治療が中心です。深頸部膿瘍などの感染や外傷なども扱いますが、主体は頭頸部に発生する腫瘍の治療です。症例の大半は口腔・咽喉頭の扁平上皮癌です。手術のほか、化学療法や放射線治療を組み合わせた集学的な治療を行う一方、進行例の手術では再建術が必要で、外科・形成外科との共同手術を行っています。頭頸部は消化器としての働き、上気道としての働き、感覚器としての働きなど極めて重要な役割を担った領域なので、予後を改善することはもとより、治療後のQOL (quality of life) に十分配慮して治療を進めています。

2018年4月には頭頸部外科と口腔外科の合同で頭頸部腫瘍センターが開設されました。窓口を一元化することにより口腔癌を始め、すべての頭頸部腫瘍についてスムーズな診断・治療が行われるように取り組んでいます。現在、写真

のように小所帯ではありますが、少数精鋭で北東北最大の頭頸部癌症例を集め、より良い治療を目指しています。

(教授 志賀 清人)



## 学事総務課

学事総務課は8名のスタッフで、学生部の運営と学生の福利厚生(学生寮管理、奨学金申請、学友会活動の支援、他)、入学式や卒業式など大学行事の挙行、父兄会の活動支援、献体の受け入れと白寿会の運営などの学務系業務に加え、矢中キャンパスにおける総務・庶務系業務や施設管理に至るまで、幅広く業務を担っています。

この中でも、学校教育法の定めにより、2020年度に受審する大学基準協会の「機関別認証評価」は重要な学事であり、当課が事務を担当する自己評価委員会を中心に鋭意準備を進めています。

また、大学を取り巻く環境が日々変化している中で、昨今は学生の気質も多様に変化してきており、学生生活に関する大学への要望も様々で、適確に対応しなければなりません。学生部の事務担当課としては、学生の皆さんが充実した学

生生活を送ることができるよう、学生部長・学生副部長の先生方のご指導のもと、日々業務に取り組んで参ります。

(課長 伊藤 努)



## 医療福祉相談室

医療福祉相談室は、社会福祉の立場から患者さんやその家族の方々が抱える社会的・心理的・経済的問題の解決、調整を援助し、社会復帰の促進を図る業務を行っており、社会福祉士・精神保健福祉士・保健師・看護師の資格を持つ医療ソーシャルワーカーが配属されています。

相談内容は非常に多岐にわたっておりますが、近年の特徴的なテーマとしては、医療的ケア児、若年出産、身寄りがいない・身元保証がない、自殺未遂、最新のがん治療技術、難病などがあげられます。これらは社会保障制度をはじめ、社会全体の理解がまだまだ追いついていない問題ではありますが、私たちの支援が患者さんに有用であるよう、日々研鑽を積んでおります。

また、医療チームと地域の関係機関との共働なしでは、患者さんの生活は成り立ちません。医療と地域を繋ぐネット

ワーカーとして機能することを常に意識し、業務に取り組んでおります。

(室長 近藤 昭恵)





## 内科学講座消化器内科肝臓分野 鈴木 悠地 助教に武田科学振興財団 2018年度医学系研究助成奨励金が贈呈されました

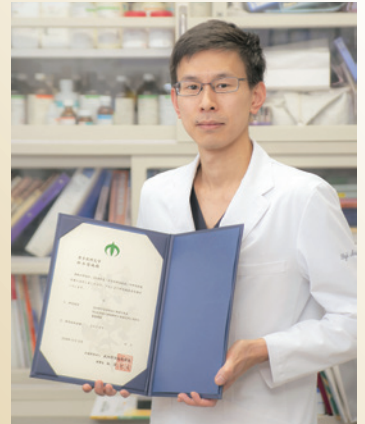
この度、平成30年11月12日に公益財団法人 武田科学振興財団2018年度医学系研究助成の贈呈式に出席しました。本助成は、医学分野の進歩・発展に貢献すると評価される独創的な研究に与えられるものです。

助成研究課題は「急性肝不全末梢血に動員されるMuse細胞の機能解析と臨床応用に向けた基盤構築」です。Muse細胞 (multilineage-differentiating stress enduring cell: ミューズ細胞) は、東北大学細胞組織学分野、出澤教授らが2010年に見出したヒト生体由来多能性幹細胞です。Muse細胞は、臓器障害が生じた際に損傷部位に遊走・分化し組織修復に寄与します。現在、Muse細胞の点滴製剤が開発され、脳梗塞と心筋梗塞を対象とした臨床試験が開始しています。

内科治療に抵抗性の急性肝不全に対しては、現在のところ肝移植が唯一の根治的治療法となります。本研究では、移植治療までの安全な橋渡しや、移植治療を受けることのできない患者さんに対するMuse細胞治療の臨床応用に向けた理論基盤の構築を目指します。

本研究は、本学医歯薬総合研究所 西塚 哲 特任教授、東北大学細胞組織学分野との共同研究として行われます。受賞にあたりご指導、ご協力いただきました皆様方に感謝いたします。

(文責：鈴木 悠地)



### 理事会報告 (11月定例－11月26日開催)

#### 1. 教員の人事について

医学部麻酔学講座 准教授  
大畑 光彦(前) 同講座 講師  
医学部麻酔学講座 特任准教授  
小林 隆史(前) 同講座 講師

(発令年月日 平成30年12月1日付)

#### 2. 平成30年度給与改定及び12月期末勤勉手当等の支給について

#### 《岩手医科大学報編集委員》

小川 彰 佐藤真結美  
影山 雄太 菊池 初子  
松政 正俊 工藤 正樹  
齋野 朝幸 熊谷 佑子  
藤本 康之 安保 淳一  
白石 博久 佐々木忠司  
成田 欣弥 畠山 正充  
遊田由希子 藤村 尚子  
佐藤 仁 武藤千恵子  
小坂 未来 高橋 慶  
藤澤 美穂

#### 編集後記

今号の表紙に掲載のように、新病院の建物が完成目前です。2007年の春には、東研究棟、図書館棟、東講義実習棟、体育館、寮棟といった構成で矢巾キャンパスがスタートしましたが、その後、超高磁場先端MRI研究施設、西研究棟、西講義実習棟、本部棟、ドクターヘリ基地、マルチメディア棟……と絶えず発展を遂げてきています。キャンパス・病院施設全体の完成までは、もう少しかかりますので、今後もその変貌に目が離せません。

(編集委員 藤本 康之)

#### 岩手医科大学報 第508号

発行年月日 平成31年1月31日

発行 学校法人岩手医科大学

編集委員長 小川 彰

編集 岩手医科大学報編集委員会

事務局 企画部 企画調整課

盛岡市内丸19-1

TEL. 019-651-5111 (内線7023)

FAX. 019-624-1231

E-mail: kikaku@j.iwate-med.ac.jp

印刷 河北印刷株式会社

盛岡市本町通2-8-7

TEL. 019-623-4256

E-mail: office@kahoku-ipm.jp

# スポット薬学講座

臨床薬学講座薬学教育学分野 教授 奈良場 博昭



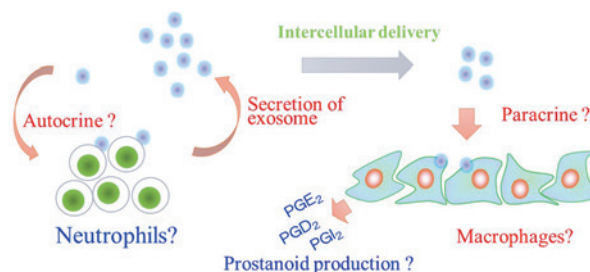
## 薬学教育学分野の研究・教育について

薬学教育学分野は、平成28年に発足した薬学部の新たなグループです（発足時は薬学教育学科）。研究および教育に関して、新たな試みを発信しています。

### ■ 研究について

近年、細胞から分泌される小胞としてエクソソームが注目されています。エクソソームは直径50から150 nmであり、表面は細胞膜と類似した脂質や膜タンパク質で構成され、内部にはタンパク質や低分子量RNAを有し、細胞内のエンドソーム由来と考えられています。このエクソソームは様々な生命現象に関わり、病態とも密接な関係があると考えられており、細胞間のメッセンジャーのような役割果たしていると思われます。当分野では、これまで炎症性病態の解析を行ってきましたが、局所炎症を全身性の反応に広げる新規の生体内システムとして、エクソソームが果たす役割を解明しようとしています。これは既知の神経伝やホルモン、オートコイドと異なる新たな細胞間、組織間コミュニケーション方法と考えています。特に慢性関節リウマチなどの難治性疾患におけるエク

ソソームの役割を解明すべく、リウマチ様症状を発症するモデルマウスを用いて循環血中のエクソソームが含有するmicroRNAの解析を行っており、関節炎の発症に相関して発現量の変化する分子種の同定を行っています。将来的に、疾患の早期発見や治療法選択の判断に有効なバイオマーカーとしてエクソソームの存在を確立したいと思っています。



### ■ 教育について

薬学教育学分野では、低学年の体験型学習のオーガナイザーを務めています。1年生の早期体験学習では、グループワークを行いながら、附属病院、調剤薬局、介護施設、ドクターヘリ、7テスラMRI、研究室などの見学、更に調剤や体験学習を行っています。これらを通して、1年次より薬学を学ぶことの意義と薬剤師の役割を自覚させ、各自の成長を促しています。また、2年次の早期臨床体験の一部として、東日本大震災における沿岸地区の被害や復興の現状を把握し、災害時の薬剤師の役割を考える試みを行っています。この際には、学

生は3カ所（大船渡と陸前高田、大槌と釜石、宮古と田老）に分かれて現地を訪れ、薬剤師や行政の担当者から直接話を聞くとともに各地の震災の跡や復興の現状を見学しています。これらの体験型学習には、薬学部および学内の多くの教員や医療施設、薬剤師会、行政職員の協力をいただいております。本学の独自性のある科目として、今後も深化させていきたいと思っています。

現在、当分野は、教員1名、研究助手1名、6年生5名、5年生1名、4年生4名が在籍しています。今後も明るく楽しい部署でありたいと思っています。